

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32411

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18555

研究課題名（和文）法学・心理学・脳神経科学の学際的研究による取調の適切性を評価する客観的尺度の構築

研究課題名（英文）Construction of objective measures to evaluate the appropriateness of interrogations through interdisciplinary research in law, psychology, and neuroscience

研究代表者

山崎 優子（Yamasaki, Yuko）

駿河台大学・心理学部・准教授

研究者番号：20507149

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：事件に関する情報を聴取する模擬取調べにおいて、面接者が「すべて話してください」のように自由報告を求める質問（オープン質問）を中心に行う方が、選択式の質問（クローズド質問）を行うよりもより正確な情報が得られた。また、非侵襲的脳機能画像法を用いた脳活動の検討結果から、左下前頭回および記憶関連領域において、オープン質問時にクローズド質問時よりも有意な活性化が得られた。以上の科学的な根拠にもとづいて、オープン質問を取調べの適切さを客観的に評価する指標にできることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

被疑者や目撃者に対する取調べで得られた供述の真偽が裁判で争点となることが少なくない。しかし、供述の信頼性が争点となる裁判において、取調べの適切性を判断する明確な指標が、裁判官、裁判員に示されることはない。本研究は、法学、心理学、脳神経科学の学際的研究によって、自由報告を求める質問が取調べの適切性を判断する一つの指標にできること、特にその科学的根拠について非侵襲的脳機能画像法を用いた脳活動の検討結果から明らかにしたという点において、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：To obtain information about a crime in mock interrogations, (1) questions that ask for free reporting, such as “Please tell me everything” (open questions), yield more accurate information than multiple choice questions (closed questions), and (2) results from non-invasive functional brain imaging show that open questions cause more significant activation in the left inferior frontal gyrus and memory-related areas than closed questions. This scientific evidence shows that open questions can be used as an objective indicator to evaluate the appropriateness of an interrogation.

研究分野：犯罪心理学

キーワード：取調べ オープン質問 クローズド質問 非侵襲的脳機能画像法 学際的研究

1. 研究開始当初の背景

事件の目撃者、被害者、容疑者から得られる情報は、事件解決の重要な手がかりとなるが、誤った情報によって冤罪が引き起こされたケースが数多く存在する。心理学者は対象者から可能な限り正確な情報を得て虚偽供述を防ぐ面接法の研究に着手し、開発された面接法が現在、複数の国の警察や検察の実務で使用されている (Bull & Rachlew, 2020)。具体的な面接法として、目撃者や被害者に対する認知面接 (Fisher & Geiselman, 1992)、子供に対する NICHD プロトコル (Lamb, et al. 2017)、被疑者に対する PEACE モデル (Bull, 2019) があげられる。これらに共通するのは面接内容が構造化されており、オープン質問 (「すべて話してください」などのように自由報告を求める質問) を重視していることである。オープン質問で得られる回答は、クローズド質問 (「A ですか? B ですか?」のように選択を求める質問) で得られる回答よりも正確であり (Waterman, Blades, & Spencer, 2001)、被疑者が嘘をついているかどうかを適切に判断するのに役立つ (Vrij, et al. 2007)。またクローズド質問は、面接者の否定的なフィードバックや暗示の強さによって記憶が変容すること (McMurtrie et al. 2012) も明らかにされている。

日本では自由報告を重視する面接法で得られた子どもの証言が裁判で証拠として採用されることもある (成富, 2021) が、大人を対象とした取調べにおいては自由報告を重視する認知面接や PEACE モデルは、警察、検察、司法に十分に受け入れられていない (稲葉ら, 2020 年; 大西, 2007 年)。また、被疑者や目撃者に対する取調べで得られた供述の真偽が裁判で争点となることが少なくないが、供述の信頼性が争点となる裁判において、取調べの適切性を判断する指標が、裁判官、裁判員に示されることはない。このような状況を踏まえると、取調べの適切性を評価する客観的な指標を確立する必要があると考えられる。またその指標や根拠は司法関係者だけでなく、将来裁判官となる可能性のある市民にも受け入れられるものでなければならないと思われる。

非侵襲的脳機能画像法を用いた研究は、これまで人の記憶や情報処理に関わる神経基盤を明らかにしてきた。前頭前野がエピソード記憶の検索において中心的な役割を果たし (Miyake et al. 2000)、左下前頭回が情報源を思い出すときに強く賦活し、正確な想起に関与していると考えられている (Miller & Cohen, 2001; Ranganath & D'Esposito, 2001; Ranganath et al. 2000)。もしもオープン質問とクローズド質問で、被面接者の記憶や情報処理に関わる神経基盤の違いが解明されれば、オープン質問の適切性を支持する強力な科学的根拠を示すことができると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、質問の種類 (オープン質問 vs. クローズド質問) によって、回答の正答率、及び暗示の影響の大きさが異なるか、また賦活する神経基盤が異なるかを明らかにすることを目的とし、次の3つの仮説をたてた。

- (1) クローズド質問よりもオープン質問の方が回答の正答率が高い。
- (2) 否定的なフィードバックによって回答の正答率が低下し、その程度はクローズド質問がオープン質問よりも大きい。
- (3) オープン質問とクローズド質問では、被面接者の神経基盤の賦活に違いがみられ、オープン質問の方が左下前頭回の活性が高まる。

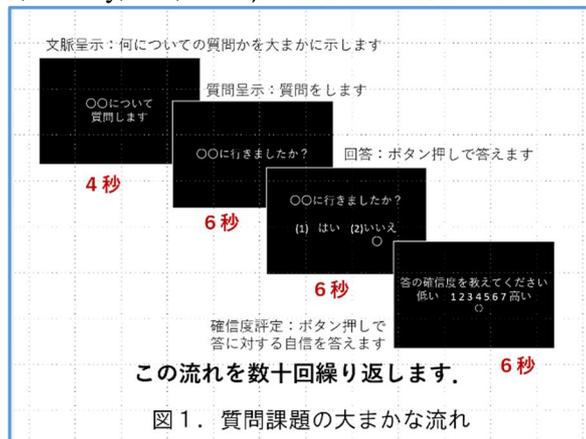
3. 研究の方法

研究の方法は次のとおりであった。

実験参加者 右利きで健康な 19 人が実験に参加した。

材料 実験参加者に提示する模擬窃盗事件に関する動画 (約 5 分) を用いた。また、質問項目、回答の選択肢、回答に対する確信度 (7 件法) の選択肢を含むすべての刺激は、Presentation 14.8 ソフトウェア (Neurobehavioral Systems, Albany, CA, USA) を使用して提示された。質問項目は、2 種類の質問 (オープン質問 vs. クローズド質問) と質問内容 (動画と関係のある内容 vs. 動画と無関係の内容) を組み合わせた。

手続き 実験参加に同意した参加者には課題の手順についての詳細な情報が与えられた。また、実験参加者は映像に登場する主人公になりきって、その場面を追体験するようにして見るように教示された。質問課題に関する説明にあたっては図 1 を用いた。実験参加者は、スキャナー内で映像視聴後、提示された質問に対して手元のボタンを押して回答した。1 回目の実験では休憩をはさんで



30 試行(図 1 に、1 施行の流れを示した)を 2 回行った。1 回目の実験終了後、実験者はスキャナー内の実験参加者に、回答を精査する間、しばらく待つように指示した。その 5 分後、実験者は参加者に、「回答を確認したところ、多くの間違いが見つかりましたので、もう一度回答を思い出してください」と否定的なフィードバックを行った。その後、2 回目の実験が行われた。実験の内容は、1 回目と同じであった。実験 1 と 2 の所要時間は約 1 時間であった。

4. 研究成果

回答の正答率、否定的なフィードバックの影響、非侵襲的脳機能画像法を用いた脳活動の検討結果は次のとおりであった。

- (1) 回答の正答率 動画に関する質問については、否定的なフィードバックを挟む 1 回目の実験、2 回目の実験ともに、オープン質問の正答率がクローズド質問よりも有意に高かった。この結果は先行研究(Hershkowitz, Horowitz, Lamb, Orbach & Sternberg, 2004 年; Naka, 2012 年)と一致するものであり、仮説 1 を概ね支持する。回答の確信度については、2 回目の実験で、実験動画に関する質問のみオープン質問の確信度がクローズド質問よりも有意に高かった。また、質問の内容に関わらず、1 回目、2 回目の実験ともに、オープン質問の回答時間がクローズド質問よりも有意に長かった。
- (2) 否定的なフィードバックの影響 否定的なフィードバックを挟む 1 回目と 2 回目の回答の変化については、動画と無関係な質問のみ、クローズド質問の方がオープン質問よりも有意に高い回答の変化率を示し、被暗示性が有意に高いことが示された。仮説 2 は一部支持された。
- (3) 非侵襲的脳機能画像法を用いた脳活動の検討 左下前頭回と記憶と関連する領域の賦活は、クローズド質問と比較してオープン質問で有意に大きく、仮説 3 を支持した。クローズド質問では、実験参加者は自分の選択を再確認するだけであるが、オープン質問では記憶を想起して言語化する必要がある。得られた結果はこのことを反映していると思われる。また 1 回目の実験(否定的なフィードバック前)が 2 回目の実験よりも脳の賦活が有意に大きかった。1 回目の実験では、参加者は初めて見る動画の内容に関する記憶を検索・想起し、質問に回答した。そして否定的なフィードバックを挟んで実験参加者はもう一度慎重に考えながら質問に回答した。このことから、同じ課題を 2 回目に行ったときよりも、1 回目に行ったときの脳の賦活がより強まったと考えられる。回答に対する確信の強さや否定的なフィードバックと脳活動の間には関連がみられなかった。

以上の結果から、クローズド質問に比べてオープン質問は、被面接者の構文処理や記憶負荷に関与する左下前頭回の賦活を促進する。そのためより正確な情報が得られると考えられる。本研究の結果から、取調べにおいてはクローズド質問よりもオープン質問が適切であること、そしてそのことを支持する有力な科学的根拠が示された。

<引用文献>

Bull, R. (2019). Roar or PEACE: Is it a tall story? In R. Bull and I. Blandon-Gitlin (Eds.) *The Routledge International handbook of legal and investigative psychology*

Bull, R., & Rachlew, A. (2020). Investigative interviewing: From England to Norway and beyond. In S. Barela, M. Fallon, G. Gaggioli, and J. Ohlin (Eds.), *Interrogation and torture: research on efficacy, and its integration with morality and legality* (pp.171–196). Oxford University Press.

Fisher, R. P., & Geiselman, R. E. (1992). *Memory-enhancing techniques for investigative interviewing: The cognitive interview*. Springfield, IL: Charles C Thomas Publisher.

Hershkowitz, I., Horowitz, D., Lamb, M. E., Orbach, Y., & Sternberg, K. J. (2004). Interviewing youthful suspects in alleged sex crimes: A descriptive analysis. *Child Abuse & Neglect*, 28(4), 423–438. <https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2003.09.021>

稲葉光行・巖島行雄・山崎優子・小原健(2020). 目的証言の信頼性評価 - 司法判断と心理学的知見の乖離について. *法と心理*, 20(1), 94-102.

Lamb, M. E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Esplin, P. W., & Horowitz, D. (2007). A structured forensic interview protocol improves the quality and informativeness of investigative interviews with children: A review of research using the NICHD Investigative Interview Protocol. *Child Abuse and Neglect*, 31, 1201-1231.

- McMurtrie, H., Baxter, S. J., & Obonsawin, C. M., & Hunter, C. S. (2012). Consistent witness responses: The effects of age and negative feedback. *Personality and Individual Differences, 53*(8), 958-962.
- Miller, E. K., & Cohen, J. D. (2001). An integrative theory of prefrontal cortex function. *Annu Rev Neurosci, 24*, 167-202. doi:10.1146/annurev.neuro.24.1.167
- Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, A. H., Howerter, A., & Wager, T. D. (2000). The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex "Frontal Lobe" tasks: a latent variable analysis. *Cogn Psychol, 41*(1), 49-100. doi:10.1006/cogp.1999.0734
- Naka, M. (2012). Effect of interview techniques on children's eyewitness reports and subsequent memories of a viewed event]. *Shinrigaku Kenkyu, 83*(4), 303-313. doi:10.4992/jjpsy.83.303
- 成富守登 (2021). 現行法における司法面接の証拠利用に関する一考察: 大阪高裁令和元年7月25日判決を素材として. *同志社法学, 3*(2), 315-360.
- Onishi, N. (2007). Pressed by Police, Even Innocent Confess in Japan. *New York Times*. Retrieved January 5, 2023, from <https://www.nytimes.com/2007/05/11/world/asia/11japan.html>
- Ranganath, C., Johnson, M. K., & D'Esposito, M. (2000). Left anterior prefrontal activation increases with demands to recall specific perceptual information. *J Neurosci, 20*(22), Rc108. doi:10.1523/JNEUROSCI.20-22-j0005.2000
- Ranganath, C., & D'Esposito, M. (2001). Medial temporal lobe activity associated with active maintenance of novel information. *Neuron, 31*(5), 865-873. doi:10.1016/s0896-6273(01)00411-1
- Vrij, A., Mann, S., Kristen, S., & Fisher, R. P. (2007). Cues to deception and ability to detect lies as a function of police interview styles. *Law and Human Behavior, 31*(5), 499-518. <https://doi.org/10.1007/s10979-006-9066-4>
- Waterman, A. H., Blades, M., & Spencer, C. (2001). Interviewing children and adults: The effect of question format on the tendency to speculate. *Applied Cognitive Psychology, 15*(5), 521-531.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 38
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして. 第10回 性的虐待, 三機関による協同面接について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 116-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 40
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして. 第11回 司法面接のトレーニングとピアレビュー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 166-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 94(11)
2. 論文標題 児童虐待と司法面接	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 896
2. 論文標題 子どもへの司法面接：国内外の動向と意義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 研修	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 42
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして. 第12回 司法面接で得られた情報の評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 139-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 指宿信	4. 巻 67(9)
2. 論文標題 司法のIT化と取調べの可視化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法学セミナー	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hope,L., Anakwah,N., Antfolk,J. Brubacher,S.P., Flowe,H., Gabbert, F., Giebels,E., Kanja,W., Korkman,J., Kyo,A., Naka,M., et al.	4. 巻 27
2. 論文標題 Urgent issues and prospects at the intersection of culture, memory, and witness interviews: Exploring the challenges for research and practice	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Legal and Criminological Psychology	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Hu Zhengfei., Naka Makiko	4. 巻 -
2. 論文標題 Eyewitness testimony in native and second languages	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psychology, Crime & Law	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1068316X.2022.2030332	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 32
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして. 第7回 被疑少年からの聴取	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 125-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 34
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして. 第8回 第三者による性被害, 捜査機関が中心となる代表者聴取について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 156-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 司法面接. 子どものマルトリートメントと精神科医療	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAKA Makiko	4. 巻 26
2. 論文標題 Gender Equality Matters: Natural Sciences vs. Humanities	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 TRENDS IN THE SCIENCES	6. 最初と最後の頁 2_72~2_74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5363/tits.26.2_72	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 845
2. 論文標題 司法面接の現状と留意点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 捜査研究	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 36
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして・第9回 幼児からの聴取，年少者への配慮が求められる事案について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 166-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Ibusuki & Lawrence Repeta	4. 巻 18
2. 論文標題 The Reality of the “Right to Counsel” in Japan and the Lawyers’ Campaign to Change It	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Asian-Pacific Journal	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 指宿信	4. 巻 20(7)
2. 論文標題 日本版司法取引制度の概要と日産自動車事件からみた運用上の問題点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビジネス法務	6. 最初と最後の頁 141-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 指宿信	4. 巻 66(3)
2. 論文標題 コロナと闘う世界の刑事司法：ITを駆使した取り組みとその課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法学セミナー	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中晶子・羽淵由子・三原恵・仲真紀子	4. 巻 20
2. 論文標題 多専門・多機関連携による司法面接の展開(2)ー通達からの4年を振り返り、さらなる展開を考える(法と心理学会第20回大会ワークショップ)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法と心理	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子	4. 巻 30
2. 論文標題 子どもの話を聴くための手法と実践例～司法面接の技法をいかして・第6回 司法面接と特別措置	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 150-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 指宿信	4. 巻 2416
2. 論文標題 取調べ録音録画媒体の実質証拠化とその規律 - 新たな証拠法則の提案	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 判例時報	6. 最初と最後の頁 112-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makoto Ibusuki	4. 巻 32
2. 論文標題 The Dark Side of Visual Recording in the Suspect Interview: An Empirical and Experiential Study of the Unexpected Impact of Video Image	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal for the Semiotics of Law	6. 最初と最後の頁 831-847
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲真紀子・上宮愛・武田知明・水留成・岡田強志・山本渉太・吉元なるよ・山城美奈子	4. 巻 11
2. 論文標題 証言・告白・愁訴－医療と司法における語りの現場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コンタクト・ゾーン = Contact zone	6. 最初と最後の頁 249-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Naka, M.
2. 発表標題 Key Note. Cooperative or Representative Interviews in Japan: Multi-agency investigative interviews of alleged victims of child abuse
3. 学会等名 i11RG (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 仲真紀子
2. 発表標題 基調講演「発達心理学の知見を司法・福祉の現場に生かす－司法面接の取り組み－」
3. 学会等名 発達心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 笹倉加奈・仲真紀子
2. 発表標題 司法面接の基礎と最近の動向
3. 学会等名 刑法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 外塚果林・山崎優子・仲真紀子・水野智幸
2. 発表標題 ワークショップ 「供述の信用性」評価について考える 性犯罪事件を素材として
3. 学会等名 法と心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武田悠衣・上宮愛・横光健吾・山本千尋・仲真紀子
2. 発表標題 ワークショップ 各機関における NICHD 司法面接研修の現状と課題ー継続的な SV を目指した司法面接トレーニングのあり方ー
3. 学会等名 法と心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飛田桂・仲真紀子
2. 発表標題 司法面接（協同面接）の現状と課題 - 被害を受けた子どもに配慮された 刑事手続とは
3. 学会等名 日本虐待防止学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 仲真紀子・小野瀬雅人
2. 発表標題 子どもからどう話を聞くか 事故，校則違反，いじめ等が疑われる場合の学校での事実の調査ー
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 仲真紀子
2. 発表標題 「研究開発と人材育成の両立を目指して」[多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装・・・における研究開発と人材育成
3. 学会等名 RISTEXオンラインセミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 仲真紀子・小野瀬雅人
2. 発表標題 チュートリアル「子どもからどう話を聞くか 事故，校則違反，いじめ等が疑われる場合の学校での事実の調査 」
3. 学会等名 教育心理学会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Makoto Ibusuki & Naoko Furuta Yamada
2. 発表標題 Vanity Fair Syndrome in Japan: A Conviction without a Criminal
3. 学会等名 iIIRG (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山崎優子・仲真紀子
2. 発表標題 事件の目撃者から得られる情報の質と量に影響する面接者の要因と被面接者の要因（口頭発表）
3. 学会等名 法と心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naka, M., Yamamoto, S. Suzuki, A., Uemiya, A., & Yokomitsu, K.
2. 発表標題 Inmates' perception of suspect interviews: Factors perceived to affect telling the truth
3. 学会等名 SARMAC (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仲真紀子
2. 発表標題 司法面接の事後的検討：心理学的な観点から．木田秋津（企画）司法面接（協同面接）の現状と課題 被害者供述の信用性確保と子どもの権利擁護を両立するために
3. 学会等名 日本児童虐待防止学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仲真紀子
2. 発表標題 司法面接の事後的検討：心理学的な観点からシンポジウムS5-37(20052)木田秋津（企画）「司法面接（協同面接）の現状と課題－被害者供述の信用性確保と子どもの権利擁護を両立するために」
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ibusuki, M.
2. 発表標題 Visual Recording and Bias : A proposal in the evidentiary rule for avoiding the confirmation bias produce by the visual image in the courtroom
3. 学会等名 Comparative Study of Criminal Justice Symposium: Accountability and Transparency in Policing and Criminal Justice in the U.S. and Japan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 指宿信
2. 発表標題 被疑者取調べの規律を考える：倫理的な取調べは可能か
3. 学会等名 法と心理学会 第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仲真紀子・山本渉太・鈴木愛弓・上宮愛・横光健吾
2. 発表標題 ほんとうのことを話す上で重要だと認識される取り調べのあり方 受刑者を対象とした調査(2)
3. 学会等名 日本心理学会84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本渉太・仲真紀子・鈴木愛弓・上宮愛
2. 発表標題 自白と否認に関わる諸要因 受刑者を対象とした調査(3)
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naka, M.
2. 発表標題 Challenges in the online training of MDT-based Forensic Interviews: Mock interviews and feedbacks オンラインによる司法面接 研修：課題と展望
3. 学会等名 日本心理学会84回大会 公募シンポジウム2
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naka, M.
2. 発表標題 Investigative Interviews with Alleged Child Victims: A Multi-Disciplinary Team Approach
3. 学会等名 The 2020 Annual Meeting of the Cultural Psychology Division of the Chinese Psychological Society Promoting Cross-Cultural Communication and Understanding in Changing Times (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 羽淵由子・仲真紀子
2. 発表標題 多機関との連携と研究成果の社会実装
3. 学会等名 認知心理学会第18回大会 社会連携委員会WS
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎優子
2. 発表標題 面接者の知識が目撃者に対する質問内容や供述内容及ばす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 デブラ・A. プール(著者)、司法面接研究会(仲真紀子)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 280
3. 書名 子どもの話を聴く(翻訳本)	

1. 著者名 田中 晶子、安田 裕子、上宮 愛、鈴木 聡、片岡 笑美子、根ヶ山 裕子、西脇 喜恵子、田中 周子、佐々木 真吾、仲 真紀子、丹藤 克也、松本 昇、三上 謙一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 児童虐待における司法面接と子ども支援	

1. 著者名 山口直也・友田明美・仲真紀子・赤羽由起夫・本庄武・山崎俊恵・須藤明・安西敦・大塚正之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代人文社	5. 総ページ数 232
3. 書名 脳科学と少年司法	

1. 著者名 糸井尚子・上淵寿・仲真紀子ほか11名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 200
3. 書名 教育心理学	

1. 著者名 青木孝之・指宿信・周防正行・平山真理	4. 発行年 2018年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 107
3. 書名 牧野茂・小池振一郎（編）取調べのビデオ録画：その撮り方と証拠化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	仲 真紀子 (Naka Makiko) (00172255)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	
研究分担者	指宿 信 (Ibusuki Makoto) (70211753)	成城大学・法学部・教授 (32630)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------